

広島大学高等教育研究開発センター
2021年度公開研究会(オンライン開催)
『国際共同研究推進事業 令和3年度採択者による公開研究会』

米国大学における地域連携学習 (SLCE)を通じた市民学習 — 専門職の役割と関与を中心に —

東京大学大学院教育学研究科
大学経営・政策コース博士課程

黒沼敦子

2022年3月3日(木)

自己紹介

- 東京大学大学院教育学研究科 大学経営・政策コース
 - 2011年 修士(教育学)
「大学教育における体験学習プログラムの教育効果—サービス・ラーニングを事例として—」
 - 2018年博士課程入学(D4)
- 元国際基督教大学(ICU) サービス・ラーニング・センター
 - 事務職員(2007年～2012年)
 - コーディネーター／講師(2013年～2020年)
 - プログラムの企画運営、関連授業を担当
 - 実践者の課題・問題意識

用語の整理

● サービス・ラーニング (SL)

- 地域社会の課題やニーズに対応する活動とその省察を通して、学習成果を達成する経験学習の教育方法の一つ (Jacoby 2015)
- シビック・エンゲージメント (市民的関与) やコミュニティ・エンゲージメント (CE: 大学と幅広いコミュニティの互惠的交流) の一部
 - Scholarship of Engagement (Boyer 1996)
- 正課に限定される傾向 (Bringle & Clayton 2012)

● 地域連携学習 (SLCE)

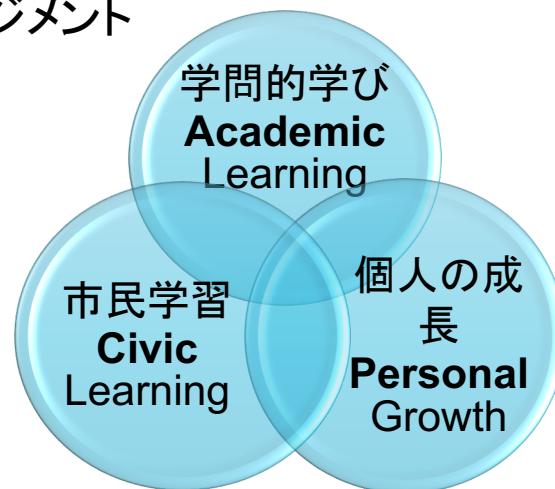
- SLを含めた地域社会と連携した教育・学習や市民的関与の総称 (五島2021)
- サービス・ラーニングとコミュニティ・エンゲージメント

● 市民学習 (civic learning)

- SLの学びの3領域の一つ

● 専門職

- 「第三の領域」で大学の教育運営を担う「複合型専門職」 (大場 2014)



(Hatcher, J.A., Bringle, R.B & Hahn, T.W. 2017)

発表内容

1. 研究の目的
2. 問題意識と先行研究
3. 分析対象と方法
4. ミドルベリー大学の事例分析
5. 結論

1. 研究の目的

- 米国リベラルアーツ・カレッジを事例とした博論研究の一部
 - 組織化、プログラムの体系化(黒沼 2021a)
 - カリキュラム構築(黒沼 2021b)
 - 担い手(黒沼 2022 掲載予定)

研究の目的

米国大学における地域連携学習(SLCE)を担う専門職の役割と、専門職による市民学習への関与を明らかにする。

2. 問題意識と先行研究

- **グローバル社会における市民の育成**
 - ・ 多様な人々との協働、社会的責任感、世界への貢献
 - ・ 学士課程教育を通じた市民性育成:「21世紀型市民」(中教審 2005)
 - ・ 教室外の学習プログラムの奨励:「インターンシップやサービス・ラーニング、留学体験等」(中教審 2012)
- **日本の大学におけるサービス・ラーニングの広がり**
 - ・ 学生ボランティア活動に対する正課教育の枠付(桜井・津止 2009)
 - ・ アクティブ・ラーニングの教育実践
 - ・ 大学による地方創生推進事業(COC等)の一環
- **日本のサービス・ラーニングの課題**
 - ・ 社会秩序や現状の維持に陥る傾向(若槻 2015)
 - ・ 市民性育成の目的や目標が希薄(長沼 2015)
 - ・ 専門人材の位置付けが不安定(武田 2011)
 - ・ コーディネーター等のキャリア形成が不透明(西川 2018)



SLを通じた市民学習を組織的な教育実践にどう落とし込むか？

米国大学におけるSLCE

●理念

- 社会の正義と変革を志向し、教育機関の公共的目的を強調。社会問題を批判的に追究し、公正な社会を目指す。そのために、社会に積極的に関与する責任ある市民を育成(唐木 2010)

●制度化の推進

- 市民学習:教育と学習の不可欠な構成要素(山田 2016)
- キャリア準備の方途として矮小化される傾向
- 社会正義や社会変革を志向する批判的SL(Mitchell 2008)

●担い手としての専門職

- 実務や地域連携のコーディネート中心の「実践家(practitioner)」
→教学運営と市民学習に関わる新たな「専門職(professional)」へ
- 社会の既存の枠組み・価値観に挑戦、大学教育と社会に変容をもたらす主体(Dostilio & Perry, 2017)

米国における専門職の研究

●コンピテンシー・モデル (Dostilio 2017)

- **社会変革の主体となる専門職 (CEPs) の専門能力**
- SLCE推進に必要な6つの領域
 - ①高等教育における変革を導く、②大学における制度化
 - ③学生の市民的学習と成長の促進、④プログラムの管理運営
 - ⑤教員の能力開発と支援の促進、⑥質の高いパートナーシップを育む
- コンピテンシー (知識・スキルと能力・素質)
- **重要な関与 (社会変革・権力・真正性)**

●Holistic Framework (全体的な枠組み)

(Welch & Plaxton-Moore 2018)

- 教員の能力開発を支援するS-LCE専門職の関与
- **4者 (学生、地域社会、教員、大学管理職)**
- 4つの文脈 (授業、地域社会、学問分野・高等教育、大学機関)

本研究の課題

1. SLCE専門職は、組織内でどのような役割を担っているのか。
2. その役割に基づき、専門職は市民学習において、関係4者(学生、地域社会、教員、大学管理職)にどのように関与しているのか。

3. 分析対象と方法

- ミドルベリー大学(米国・バーモント州)
 - リベラルアーツ・カレッジ(LAC)
 - 市民性育成理念、組織主導の全学展開
 - カーネギー・コミュニティ・エンゲージメント分類認証(2006, 2015)
- 単一事例研究(メリアム 2004)
 - 個別大学の文脈に沿った実証的研究
 - インタビュー調査、公式HPを含む公開資料、現地入手資料
 - インタビューデータは帰納的に分析(MAXQDA利用)
 - 市民学習への関与の検討: 学生・地域社会・教員・大学管理職の
関係4者の枠組みを援用(Welch & Plaxton-Moore 2018)

インタビュー調査概要

- 時期:2018年11月予備調査→2020年1月に再度現地訪問調査
- 形式:半構造化インタビュー
- 質問項目:
 - <ディレクター>大学戦略、SLCEの目的、大学執行部と学内組織との連携、カリキュラム開発。
 - <プログラム担当者>組織における役割、市民学習の成果として学生に期待する内容、教育実践への関与について
 - <全員>過去のキャリアとその活かし方

インタビュー調査対象者一覧

		役職・職名	インタビュー日付・時間
ディレクター		CCEディレクター	2020年1月28日・30日(49分・50分)
ム プ 担 口 当 グ 者 ラ	A氏	CCEプログラム・ディレクター	2020年1月28日(38分)
	B氏	CCEアシスタント・ディレクター	2020年1月30日(49分)
	C氏	「特権と貧困」担当アシスタント・ディレクター	2020年1月27日(45分)
	D氏	ランゲージ・イン・モーション・コーディネーター	2020年1月30日(42分)

4. ミドルベリー大学の事例分析

- (1) 大学の理念と戦略
- (2) SLCEのプログラム
- (3) 専門職の役割
- (4) 専門職による市民学習への関与

(1) 大学の理念と戦略

- 1800年創立。学生数約2,500名、小規模私立大学
- 米国で最も威信の高いLACの一つ、厳格なリベラルアーツ教育
- 「タウンカレッジ」として地域とともに発展
- リベラルな学風、国際性を志向
- 学部教育を行うカレッジ、国際関係と通訳翻訳の大学院、17カ国にある海外拠点校、語学学校を運営

● 機関全体の戦略枠組

- 「Envisioning Middlebury」を策定(2018年)
- ミッション・ステートメント
 - 「倫理的な市民が知的、地理的、文化的境界を越えて活動するインクルーシブな公共圏を創るために、地域社会に貢献し、世界で最も困難な問題に取り組む人材を育成する」
- 重要な教育の方向性: 経験学習

(2) SLCEのプログラム

- **教学系組織を中心とした全学展開(黒沼 2021a)**
 - コミュニティ・エンゲージメント・センター
 - キャリア・インターンシップ・センター
 - クリエイティブ・イノベーション・アントレプレナー・センター
- **コミュニティ・エンゲージメント・センター(以下、CCE)**
 - 「社会貢献、学識、市民性」
 - 「地域、国内、グローバル社会との繋がりの中で、学生の市民としてのアイデンティティ、知識、スキルを強化することで、地域社会に貢献し、公共善(public good)に寄与する」
 - 学習と省察、リーダーシップ、地域社会への責任、グローバル意識の促進
 - 国内外の社会正義に関わる問題に取り組む様々な機会を提供
 - 年間1500名以上の参加者(全学部生の3分の2)

CCEの教育方針

“「私たちにとって重要なのは、基本的に2つのことです。それは、学生の学びと地域社会とのパートナーシップです。学生は教室内で学ぶだけでなく、教室外でも学びます。地域社会では、カリキュラムと連動するニーズもあれば、カリキュラムと連動しないニーズもあります。だからこそ、私たちはその両方（正課内外）に対応する義務があると考えています。...CCEとしては、両方の形で関係者を知っているので、より意味があると考えています。...そして、地域社会との繋がりが常にあることが、より重要だと感じています。」(ディレクター)

正課・準正課プログラムの提供

- 準正課 (co-curricular/co-curriculum)
 - 単位は付与されないが、大学の責任下で実施し、教職員が教育的意図を持って関与する取組
 - 米国の学生支援系プログラムに多く存在する位置付け(小貫2014)

CCEのプログラム

	取組	名称	内容
正課	専門科目＋準正課インターン	「特権と貧困」(P&P)学術クラスター	経済的不平等をテーマに、学部の専門科目の履修とCCEの準正課インターンシップを行うプログラム。学際的に貧困問題を検討
	科目	学生アシスタント(TA)プログラム	専門科目の地域プロジェクトを支援する学生アシスタントの養成
	資金提供	アカデミック・アウトリーチ助成金	授業の一環として行う社会課題と学問を統合する活動と学術的成果報告に対する経済支援(教員・学生対象)

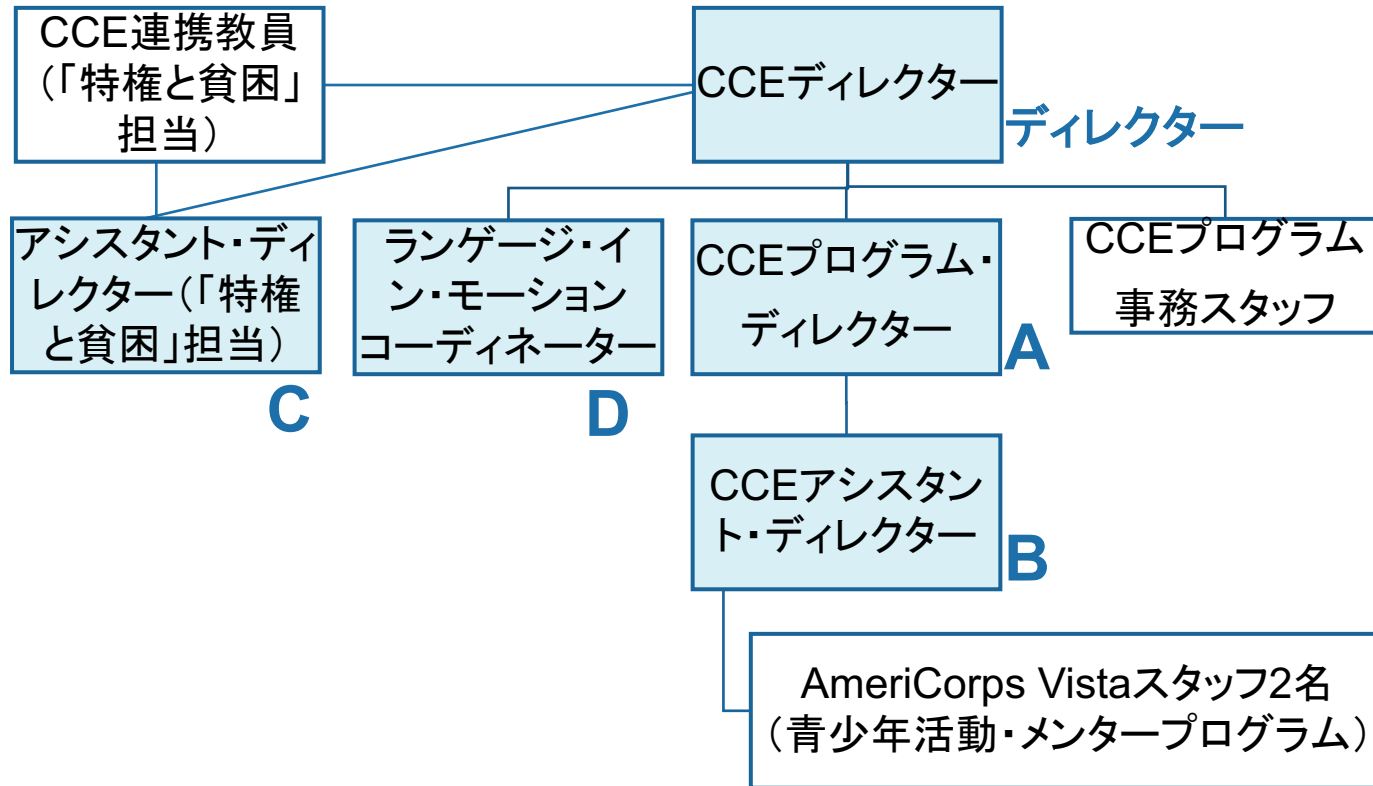
[出所]大学公式ウェブサイト、Middlebury College(2015)を元に筆者作成。

CCEのプログラム(続き)

取組	名称	内容
準 正 課	「特権と貧困」(P&P)インターンシップ	郡内・国内の貧困問題に取り組む団体での休暇中の有償インターン
	ランゲージ・イン・モーション (LiM)	留学生・留学経験者が地域の小中高の教師を協働し、外国語授業や異文化理解授業を支援するプログラム
	日本サマーSL (JSSL)	休暇中に日本でアジア各国の学生と共に地域貢献活動を行うプログラム
	社会貢献活動トリップ (MAIt)	休暇中に学生チームが国内外で社会貢献活動を実施 移民・難民、環境保護活動、災害復興支援等
	市民リーダーシップ修了証	市民としてのスキルと実践を対話型ワークショップで学ぶ学生団体のリーダー対象の1年間の集団プログラム
	コミュニティ・フレンズ	小学生を対象とした1対1のメンタープログラムを通じた教育支援活動
学 生 活 動	民主主義活動支援 (MiddVote)	学生による民主主義の活動。選挙登録支援、投票所への送迎、アドボカシー等
	学生団体(19団体)の社会貢献活動	ホームレス支援、移民・難民支援、高校生向け大学準備教育、子どものメンタリング等に取り組む学生団体の支援
提 資 供 金	異文化コミュニティ・サービス基金、ミニ助成金等	学生が主体的に行う国内外の地域活動に対する経済支援

(3) 専門職の役割

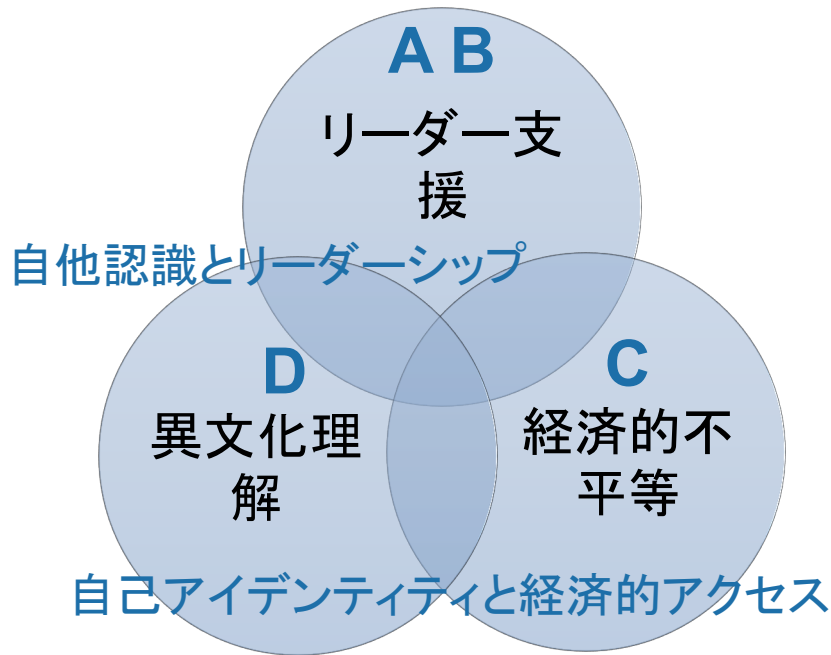
- 管理職(1名):ディレクター
- プログラム担当(4名):A・B:学生支援系、C・D:地域連携系



職務内容、専門・経歴

呼称		主な職務内容	専門(学位)	経歴
管理職	ディレクター	事業全体の管理運営、機関戦略策定、資金調達、教員支援	宗教学(学士)	卒業生。4つの大学で入試関連業務(5年)、ミドルベリー大学にて SLCE管理職(35年)
プログラム担当	学生支援系	A氏 MAlt、民主主義活動 リーダー支援 、助成金管理運営	学生支援(修士)	卒業生。AmeriCorpsで貧困削減活動、州立大で学生寮プログラム運営(1年)
		B氏 学生19団体 リーダー支援 、学生TA養成を通じた 教員支援	教育リーダーシップ(博士)	州立大でリーダーシップ関連 授業担当 ・学生寮プログラム運営(10年)
	地域連携系	C氏 地域連携プログラム企画運営、 教員支援 (P&P学術クラスター： 経済的不平等)	地域開発・応用経済(修士)	非営利団体等のコンサルティング業務(10年)、州立大SLコーディネーター・講師として 授業担当 (10年)
		D氏 地域連携プログラム企画運営(LiM、JSSL： 異文化理解)	異文化コミュニケーション(修士)	海外で英語教師、非営利団体等で女性のエンパワーメント(10年)、州立大エクステンションで青少年教育

職務内容の個別性と相互性



“「私たちはそれぞれの分野で活動していますが、CCEで行なっている全ての活動には、素晴らしい重なりがあると思います。たとえそれが主要な焦点ではなくても、あるいは最も目に見える形ではなくても、私たちの各分野には、ある程度、他の分野が含まれています。」
(D氏)

専門職が各プログラム・活動の重なり合い、相互性を共有



市民性を育成する組織的取組として一体感を見出す

(4) 専門職による市民学習への関与

- 関係4者(学生・地域社会・教員・大学管理職)に対する関与を(3)の役割に依拠して考察する

			①学生	②地域社会	③教員	④大学管理職	
プログラム担当	学生支援系	A氏	①				
		B氏			③		
	地域連携系	C氏			②		
		D氏					
職管理	ディレクター			③	④		

①学生への関与：プログラム担当

学生
支援系

個別相談・トレーニングの
実施(省察・協働)

➡市民的スキルの獲得

対等な人間関係の構築

➡リーダーシップ育成

地域
連携系

プログラム参加学生に対し、
省察活動を実施

➡批判的意識の醸成

プログラム
担当共通

専門職自身が社会正義や
地域社会に問題意識を持
つ

➡能動的市民の育成

社会正義・地域社会に対する問題意識

“「私は学生にアドバイスをしていますが、私自身が経験したことのない問題がたくさんあります。...積極的な市民活動の一環として、問題意識を持ち、味方になることが必要なのだと思います。...私たちは、社会正義の問題について、誰もが情報や知識に乏しい可能性があり、どうすればお互いに学び合うことができるのか、ということ^を学生に伝えようとしているのだと思います。」(A氏)

“「私はずっと、地域社会に根ざした組織で仕事をしてきました。そして、それは私個人のアイデンティティと仕事が完全に結びついたものでした。ですので、私は大学と同じくらい地域社会に対して責任があると感じています。これは私の理念と一致する方法なのです。」(D氏)

②地域社会への関与：地域連携系

地域連携系

大学と地域社会の間に立つ

地域の活動に参画、意思決定の対話に関与

➡力関係を排除した互恵的関係性の構築

➡一貫性と継続性のある関係構築

➡質の高い市民学習の機会創出

力関係の排除と互恵的関係性の構築

“ 「ミドルベリー大学だけでなく、我々は(Do WE)、このプログラムをここに導入するかどうか、という話になったのです。つまり、このコラボレーションを始めるかどうかは、地域の人たちと一緒に決めたのです。...これはミドルベリー大学の学生のためになると思うが、高校や生徒のためにもなると思うか、というものでした。...つまり、相互の利益を認識することから生まれたのです。丘の上の帝国(大学)のような感じで、地域にとって何が良いのか決めつけ、学生のための利益を得ようとしているのではありません。」(D氏)

③ 教員へ関与： ディレクターと正課教育経験者

ディレク
ター

正課教育
経験のあ
るプログラ
ム担当

広範な経験学習を対
象に、教員全体を広く
支援し、正課の取組を
増加

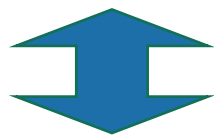
経験学習推進のため
の取組モデル

➡ 市民学習の更なる
質的向上

➡ 市民学習に対する
認知向上

認知向上のための取組モデル推進

“ 「準正課の経験を維持しながらも、それを学術的なものに結びつけることで、伝統的な構造の中で、学生の学びの価値を認めてもらえるような方法を考えています。というのも、現在、大学管理職が進めているのは単位認定のための取組なので、その方法については創造的に考えなければならないと思います。」(B氏)



“ 「実践者として仕事をすることが、とても重要だと思います。学術機関と地域パートナーの間に立つことで、互恵的な繋がりを確認し、その繋がりを引き出すことができるのです。自分の専門分野で実践を行っている教員もいると思いますが、彼らにとって、これ(互恵的な繋がり)はあまり重要でないかもしれません。」(C氏)



伝統的アカデミズムにおいて、教育のモデルとして浸透するか？

④大学管理職への関与：ディレクター

ディレク
ター

学内組織の連携によ
る教員支援の強化

➡市民学習の更なる
制度化

教育面での協働
柔軟な人事配置

大学の意向・変化と
の整合性の検討

➡市民学習の戦略的
推進

大学の意向・変化との整合性の検討

“「私たちは常に大学や地域社会での新しい優先事項への対応と、我々が継続したいと考えている仕事の基本的な核心部分とのバランスを見極めようとしています。」(ディレクター)

リスク

- 経済不況による組織的関心の減退
- 財政的な圧力による学内での資源の争奪→教育実践の選別
- 上層部の交代による組織再編



構造的制約の中で市民学習を戦略的に推進

結論

日本への示唆、今後の研究課題

事例分析結果

● SLCEを通じた市民学習

- 教育理念：経験学習を通じた倫理的な市民の育成
- 大学内の支援組織
- 国内外の社会正義に関わる問題に取り組む機会を提供
- 学生の学びと地域社会とのパートナーシップ、地域社会との継続的な繋がりを重視

● 専門職の役割

- 管理職（ディレクター）とプログラム担当に大別
- プログラム担当：専門性と経歴→学生支援系・地域連携系の役割
- プログラム担当の職務内容：個別性が高いが、相互性を共有
→一体感のある組織的取組を推進

● 専門職による市民学習への関与

- 役割によって、その相手・目的・内容が異なる

市民学習への関与（役割別）

プログラム担当 共通

- 専門職が社会正義・地域社会への問題意識を持ち、学生の市民性育成を支援

学生支援系

- 相談・トレーニングによる学生の市民的スキル獲得
- 対等な人間関係を通じたリーダーシップ育成

地域連携系

- 省察活動で学生の批判的意識を醸成
- 力関係の排除と地域社会との互恵的關係性構築、市民学習の機会創出

ディレクター・ 正課授業経験者

- 経験学習を行う教員を広く支援することによる質的向上
- 取組モデルとして、アカデミアの中での認知向上
＜課題＞理解の促進

ディレクター

- 学内連携を通じた教員支援強化による更なる制度化
- 大学の意向や変化と整合性を図り、市民学習を戦略的に推進
＜課題＞構造的制約の中で推進

➡ 青字下線：社会変革の主体となる専門職の「重要な関与」の
枠組みと通じる特徴（Dostilio 2017）

日本への示唆

異なる役割を担う専門職による、関係者への関与



SLを通じた市民学習の推進

その担い手に関する課題の検討

今後の研究課題

- 専門職の価値観・アイデンティティ: 専門能力開発、専門性
- 教員との協働の実相: 市民学習の質的向上
- 大学管理職の関与: 市民学習の制度化の促進

参考文献(日本語)

- ・大場淳(2014)「大学職員研究の動向:大学職員論を中心として」『大学論集』46:91-106.
- ・唐木清志(2010)『アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング』東信堂.
- ・黒沼敦子(2021a)「米国大学におけるサービス・ラーニングの組織化—ミドルベリー大学の事例—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第60巻:485-495.
- ・黒沼敦子(2021b)「リベラルアーツ・カレッジのサービス・ラーニング—ミドルベリー大学を事例として—」福留東土・戸村理・蝶慎一編『教養教育の日米比較研究』高等教育研究叢書158、広島大学高等教育研究開発センター:47-58.
- ・黒沼敦子(2022)「米国大学の地域連携学習(SLCE)を通じた市民学習における専門職の役割と関与—ミドルベリー大学を事例として—」『大学経営政策研究』第12号(掲載予定)
- ・五島敦子(2021)「米国大学における地域連携専門職の専門能力開発:キャンパス・コンパクトの資格認定プログラムを中心に」南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編 第21号:169-178.
- ・桜井政成・津止正敏編(2009)『ボランティア教育の新天地—サービスラーニングの原理と実践』ミネルヴァ書房.
- ・武田直樹(2011)「日本の大学教育におけるサービスラーニングコーディネーターの現状と課題」『筑波学院大学紀要』第6集:119-131.
- ・中央教育審議会(2005)『我が国の高等教育の将来像(答申)』
- ・中央教育審議会(2012)『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)』
- ・長沼豊(2015)「日本の教育的文脈におけるService Learningの意義とこれからの展望:既存のボランティア学習との関連から(サービス・ラーニングの可能性)」『ボランティア学研究』第15号:5-15.
- ・西川一弘(2018)「コーディネーターの多様性とキャリアに関する一考察」『大学地域連携研究』Vol.5:51-57.
- ・馬場洸志(2020)「サービス・ラーニングコーディネーターのリフレクションとトレーニングへの関与に関する事例研究:アメリカの大学でのインタビュー結果をもとに」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』Vol.34:29-42.
- ・メリアム, S. B.(2004)『質的調査法入門:教育における調査法とケース・スタディ』(堀薫夫・久保真人・成島美弥訳)ミネルヴァ書房
- ・山田一隆(2016)「米国高等教育におけるサービスラーニング」『政策科学』23(3):113-136.
- ・若槻健(2015)「サービス・ラーニングとシティズンシップ教育の関連性について」『ボランティア学研究』第15号:7-26.

参考文献(英語)

- Boyer, E.L. (1996). The scholarship of engagement. *Journal of Public Service & Outreach*, 1(1), 11-20.
- Bringle, R. G., & Hatcher, J. A. (1996). Implementing service learning in higher education. *The Journal of Higher Education*, 67(2): 221-239.
- Bringle, R. G. and Hatcher, J. A. (2000). Institutionalization of service learning in higher Education. *The Journal of Higher Education*, 71(3): 273-290.
- Bringle, R. G., & Clayton, P. H. (2012). Civic education through service-learning: What, how, and why?" *Higher education and civic engagement: Comparative perspectives*, edited by L. McIlraith, A. Lyons, & R. Munck, New York, Palgrave Macmillan: 101-124.
- Dostilio, L. D. (2017). Planning a path forward: Identifying the knowledge, skills, and dispositions of second-generation community engagement professionals. *The Community Engagement Professional in Higher Education: A Competency Model for an Emerging Field*, (27-55), Boston, MA: Campus Compact.
- Dostilio, L. D., & Perry, L. G. (2017). An explanation of community engagement professionals as professionals and leaders. *The Community Engagement Professional in Higher Education: A Competency Model for an Emerging Field*, (1-26), Boston, MA: Campus Compact.
- Hatcher, J. A., Bringle, R. G., & Hahn, T. W. (2017). *Research on student civic outcomes in service learning: conceptual framework and methods*. Virginia: Stylus Publishing.
- Jacoby, B. (2015). *Service-Learning Essentials: Questions, Answers, and Lessons Learned*. San Francisco: Josey-Bass.
- Middlebury College. (2015). *The Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching, Elective Community Engagement Classification, Re-classification Documentation Framework (for Campuses that Received the Classification in 2006 or 2008)* (現地入手資料).
- Mitchell, T. D. (2008). Traditional vs. critical service-learning: Engaging the literature to differentiate two models. *Michigan Journal of Community Service Learning*, 14(2), 50-65.
- Welch, M., & Plaxton-Moore, S. (2018). A holistic framework for educational professional development in community engagement. In Berkey, B., Meixner, C., Green, P. M. & Eddins, E. A. (Eds.), *Reconceptualizing Faculty Development in Service-Learning/Community Engagement* (27-58), Sterling, VA: Stylus Publishing.

ご清聴ありがとうございました

黒沼敦子

akuronuma@g.ecc.u-tokyo.ac.jp